

生文研メール

12号

平成21年12月13日

Ver. 1.0.6

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市北区伊福町

2-16-9

ナトルグム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり(12)	今田節子	1
民間伝承にみる海藻の効用	新田義之	3
体験的生活文化史 昭和編 その十二	村上春樹と読本の方法 研究こぼれ話	12
	広嶋進	5
不思議な出会い (その十二) 琉球・沖縄	横山學	7
お知らせ		8

日本人と海藻のかかわり(12)

民間伝承にみる海藻の効用

今田節子

今日、海藻は健康食として再評価されている。

この健康食としての認識はすでに近代初期ごろ(明治・大正・昭和初期)から存在していたもの

で、海藻の食文化について聴き取り調査をする過程でしばしば「海藻は健康によい」「テングサは血圧に効く」などの海藻の効用について聞くことがあった。そこで、民間に伝承されてきた海藻の効用を紹介し、伝統的食生活のなかでどのような位置づけをもっていたかを探ってみたい。

「表1」「表2」は聴き取り調査結果および昭和初期の食生活について記録された『日本の食生活全集』を資料に海藻の効用と使い方をまとめたものである。褐藻類のコンブは心臓病、高血圧、糖尿病、胃痛、胸やけ、便秘、風邪など、実に様々な病気や症状に効果があるとされている。ネコンブやメカブ、マツモは高血圧に、ヒジキやハバノリは中風などの循環器系の病気や症状に効果があり、ホンダワラは腹痛、胃痛、皮膚病などに効果があるといわれる。すなわち褐藻類はおもに消化器系や循環器系の病気や症状の軽減に有効であると思なされてきたようである。そして、海藻の使い方、ほとんどが煮物、酢の物、味噌汁などの料理として食卓に上るものばかりで、一部にコン

ブやネコンブの煎じ汁や湯浸けにした汁を飲用するものがあった「表1」。しかしながら、粉末状や煎じ汁を飲む漢方薬のような利用は僅かで、食事としての利用が主体であった。

紅藻類については、カイニンソウ(マクリ)のように駆虫薬として用いる事例が多く、今日と衛生状態が大きく異なる生活環境を反映しているように思われる。次いで消化器系、循環器系の病気に効くとされ、イギス、テングサは高血圧に、イギス、シラモは冷え腹、下痢に効き目があるときれてきた。繊維質が多く消化がよいとはいえない紅藻類が下痢や腹痛の改善に効果があるということとは意外な結果である。そして、トリノアシには利尿作用が、フノリには歯痛や胆石、化膿止め効果が認められていた。紅藻類は加熱溶解し冷却すると凝固する性質があるが、イギスやテングサはこの性質を活かしたイギス料理やトロテンに、凝固性の低いシラモやオゴノリは酢の物にするなど、それぞれの調理性を活かした料理が効用を期待して作られ食べられている。一方で、カイニンソウ、トリノアシ、フノリなどは、紅藻の成分を煮出した煮汁が治療に使われており、これらは漢方薬的な利用法といえる「表2」。

緑藻類の効用は事例が多いとはいえないが、煎じ汁を飲むことによってミルは虫下しに、アオサは下痢や腹痛に効果があるとされ、アオノリは海藻を患部に貼ることで虫刺されの炎症を治めると

表1. 民間に伝わる褐藻類の効用

海藻名	効用	使用例	料理	煎じ汁・他
コンブ	心臓病	コンブ・たこ・小豆の煎じ汁(沖縄)		○
	高血圧	コンブと椎茸の煮物(岩手) コンブ酒(岩手)	○ ○	
	糖尿病	コンブ・小豆・かぼちゃの煮物(沖縄)	○	
	胃痛	コンブと野菜の煮物(広島)	○	
	胸やけ	コンブと野菜の煮物(広島)	○	
	風邪引き	コンブ・すめ・橙に熱湯をかけた汁(香川)		○
	便秘	コンブ湯(岩手)		○
ネコンブ	高血圧	湯冷ましに浸した汁(福井)		○
メカブ	高血圧	とろろ(三重)	○	
ヒジキ	中風	ヒジキ入り五目ずし(徳島)	○	
	胸やけ	煮物(岩手)	○	
	痔病	ヒジキの煮物(岡山)	○	
モズク	産後	雑炊(沖縄)	○	
	病人	雑炊(沖縄)	○	
ハバリ	中風予防	味噌汁(鳥取)	○	
ホンダワラ類	腹痛	味噌汁(岡山)	○	
	胃腸病	味噌汁(岡山)	○	
	皮膚病	風呂に入れる(福井)		○
マツモ	高血圧	酢の物(青森)	○	

※本表は聴き取り調査結果と『日本の食生活全集』より作成したものである。

※本表には特定の病気および症状に対する効用を示した。

表2. 民間に伝わる紅藻類・緑藻類の効用

	海藻名	効用	使用例	料理	煎じ汁・他
紅藻類	イギス	冷え腹	雑炊(香川)	○	
		高血圧	米糠汁で炊き凝固させたもの(兵庫)	○	
		下痢	米糠汁で炊き凝固させたもの(兵庫)	○	
	オゴリ	便秘	酢の物(千葉)	○	
	カイニンソウ(マクリ)	虫下し	煎じ汁(沖縄・鹿児島・福井・大分・山口)		○
			マクリ・かんぞう・たいおうの煎じ汁(岡山)		○
	キリンソウ	耳の病気	汁をぬる(熊本)		○
	シラモ	下痢・腹薬	シラモ粥(岡山)	○	
	テングサ	高血圧	煮汁(千葉)		○
			トコロテン(長崎)	○	
トリノアシ	利尿剤	煮汁(長崎)		○	
フリ	歯痛	煎じ汁(高知)		○	
		化膿止め	煎じ汁(高知)		○
		胆石	不明(和歌山)		
寒天	便秘	凝固させる(岡山)	○		
緑藻類	アオリ	虫さされ	はる(千葉)		○
	アオサ	下痢・腹痛	煎じ汁(鳥取)		○
	ミル	虫下し	煎じ汁(鳥取・山口)		○

※本表は聴き取り調査結果と『日本の食生活全集』より作成したものである。

※本表には特定の病気および症状に対する効用を示した。

されてきた「表2」。緑藻類の効用は漢方薬的な利用に特徴がある。

以上のように、褐藻類、紅藻類、緑藻類を合わせる、海藻は実に様々な病気の治療や症状の軽減に役立つてきたことがわかる。なかでも消化器系や循環器系の病気、そして駆虫薬としての利用が多く、地域差も認められないことから伝統的生活のなかでは、漁村、農山村を問わず知られていた海藻の効用とみなすことができよう。

「表1」「表2」に示した特定の病気に対する効用ではなく、健康増進や美容を目的とする保健食としての利用も多い。農繁期の栄養・滋養食としてコンブの煮物や汁物、夏の食欲減退を防ぐ冷たいトコロテン、土用の葉としてイギス料理、血液をきれいにし、濃くするカイニンソウの味噌汁やムカデノリの料理などがあげられる。そして、髪の毛のつや出しには煮汁が粘り気をもつフノリやオニクサが使われていた。このような保健食としての利用も、ほとんどが日常的な家庭料理で、体調や季節を考慮した利用はまさしく食事の一品としての利用である。

さらに、年中行事や祝い事で作られる行事食にも精神性の高い効用が含まれていたとみなすことができる。例えば、安産祈願や子供の成長祈願、万病予防の健康祈願にはコブ巻きやコンブ汁、コンブ入りの七草がゆ、糸コンブ入り混ぜご飯などのコンブ料理が作られ、万病予防や疫病予防には

ワカメの酢の物やメカブのとろろ、ヒジキの煮物などが作られていた。これらは行事自身が精神的意味を持ったものであるといえ、海藻類は縁起物としての料理であつたと見なす方が妥当であろう。しかし、前述してきたように海藻類がもつ特定の病気や症状の軽減に対する効果、そして健康増進に対する効果などが行事食となり得た背景に存在したといえないだろうか。

以上のような民間に伝承されてきた海藻の効用は、①特定の病気や症状に効くもの、②健康増進・美容に効くもの、③行事との関わりが深く精神性の高いものに大別され、ほとんどが煮物や汁物、酢の物や和え物、寄せもの等の料理としての利用であるという点に大きな特徴が認められた。このことは日常食や行事食として海藻料理を食すること自体が病気の治療や予防に、また健康管理に繋がる合理的な食習慣であることを物語っている。したがって効用をもつ食べ物としての海藻利用は、海藻の食文化の一環として位置づけられるものであるといえる。

【主な参考文献】

日本の食生活全集編集委員会編『日本の食生活全集』全四十八巻、農山漁村文化協会、一九八四～一九九二年。
今田節子『海藻の食文化』、成山堂書店、二〇〇三年。

体験的生活文化史 昭和編 その十二

新田義之

前述のように一九五九年八月十七日の夜半に横浜港を出たラオス号は、二十一日の早朝に香港の対岸の港町九竜（チウロン、カオルーン）に到着した。そこから渡船で香港に行き、香港島の中央に聳えるヴィクトリア・ピークなどを見物して船に戻った「写真1」。香港はもちろん現在の規模とは比較すべくもないが、当時まだ復興の途に着き始めたばかりの東京から来た我々の眼には、巨大なビルが林立する活気に溢れた国際商業都市の印象は強烈であつた。船のボーイから、ここでは世界の高級品が非常に安く手に入るからと聞かされていたが、給費留学生の身では見物するのが一杯で、買い物はもちろん出来ず、夕食も船に帰ってとつた。後に、その頃同じユースを辿ってヨーロッパに行った友人が、香港のタックスフリーの店でスイス製の高級時計を驚くべき安値で買ったが、ある日うっかりそれをズボンのポケットに入れたまま洗濯機に掛けてしまった。どうせあの値段なら偽物に相違ないからとあっさり諦めていたが、どうしてどうして洗濯後もまったく狂わず正確無比だった、という話をしてくれたことがある。容易に国外に出る機会のなかった当時の一般庶民には、非課税品マーケットというものの存在



【写真1】香港ヴィクトリア・ピークの頂上で。左から
マリカール夫人、妻と同室だった安田悦子女史、妻。

すら、極めて縁の遠いものだったのである。
香港の次の寄港地はマニラだった。八月二十四日、港に入る前に船長から日本人乗客に注意があり「フィリピンには太平洋戦争当時の日本軍統治の記憶が強く残っており、今でも住民の対日感情が非常に悪いから、くれぐれも危険な場所には近寄らないように」ということだったが、恐々ながら一応は上陸して見物することにした。
町を歩くと爆撃で破壊された教会堂の前に極めて貧弱な庶民の家があり、その向こうには高層の



【写真2】マニラの一角。左手の建物の右方に遠くに高層ビルがうっすら見える。

ビルが建ち、ゴミの溜まった汚い道にはアメリカ製の高級車が置いてあったりして「写真2」、いよいよこれから、かつて南アジアの植民地とよばれた世界に入っていくのだという緊張感に包まれた。見物したのはヴィクトリアパークの平和記念碑、教会のパイプオルガンとその演奏くらいで、忽々に船に帰ったが、船もあまり長居はせず翌日出航し、次の寄港地サイゴン（現在のホーチミン）に向かったのだ。

サイゴンは一八八三年以来フランス領だったベトナムの大都市であるが、ベトナムは一九四五年に独立してベトナム民主共和国となってからも

フランスの介入に悩まされていた。そこにアメリカが介入して五五年にベトナム共和国を建設し、首都をサイゴンに置いた。私たちがサイゴンを訪問した五九年は、つまりこのアメリカの傀儡政権が統治していた時期である。ついでにその後の動きを述べるならば、六〇年に南ベトナム解放民族戦線が結成され、ハノイにある民主共和国政府の支援のもとにアメリカの勢力を排除する独立戦争に突入した。いわゆるベトナム戦争である。七三年にアメリカはベトナムから撤兵し、その三年後に南北ベトナムは統一して、現在のベトナム社会主義共和国が誕生したのである。

さてマニラからサイゴンに向かったラオス号は八月二十六日にメコン川に入り、サイゴンの港に到着したが、メコン川を航行中に壮観であったのは、あちこちに沈没した船の錆び果てた残骸が船腹や舳先を水面から突き出したまま横たわっている姿であった「写真3」。中には旧日本軍の輸送船の残骸もあって、太平洋戦争の傷跡が戦後十年以上経っても殆んど癒されることなく外界に晒されている以上、人々の心の中に残った傷跡も未だ生々しいに違いないと思われた。

サイゴンは落ち着いていて、表通りはフランスの都市そのものの立派さだったが、裏通りに入ると狭く、現地人の住む建物は極端に貧弱で不潔であった。これが植民地の実態なのだと思うと、鎖国政策が破られてから後の日本の辿った歴史が、



【写真3】メコン川の河口付近には、沈没した船舶の残骸が多かった。

これまでとはまた異なる色の光に照らされるのを感じた。サイゴンがかつてのフランス領であり、フランス郵船会社のアジアでの主な拠点でもあったため、ここで降りる客もありまた新たに乗り込む客もあったので、船の停泊した日数も4日を数えた。船員たちもゆっくり休息をとって、次の寄港地シンガポールに向けて出発した時、ボーイたちは皆上機嫌であった。そのおかげか、またはサイゴンでお客の入れ替えがあったためか、これまでは別々の部屋で過ごしていた妻と私は、出航前に二人部屋に移してもらったことが出来た。

シンガポールに着いたのは八月三十一日で、こ



【写真4】セイロン市内の佛教寺院。

こは日本軍が占領している間の秩序維持が良かったせいか、住民は一般にかなり親日的で、日本語が少しできる人も多かった。しかしタクシーに乗ろうとしたり露店で買い物しようとしたりすると、常識で考えられる十倍は下らない金額が吹っかけられるので、これも植民地のせいなのか、定価で買うのが普通で、値切ることなどはしたくないと思っているの方が世間知らず、いや世界知らずなのかと考えさせられたものである。ただこの地での滞在は一日しかなく、殆んど何も見る暇がなかったように記憶する。

次の寄港地はセイロン（現在のスリランカ）のコロンボ、つまりセイロン島最大の都市で、ここには九月四日の夜に着いた。紀元前三世紀に佛教が伝来して以来、南方佛教の中心地である。十六

世紀以降はポルトガル、ついでオランダの領地となり、一八〇二年にはイギリスの直轄植民地となった。太平洋戦争の終結後にはイギリス連邦内の自治領として独立し、一九七二年にスリ・ランカと改称して共和国となったのは周知の通りである。従って私たちが立ち寄ったのはイギリス連邦自治領であった頃である。ここで私たちは始めて南方佛教の寺院「写真4」を訪ねたりして多少なりとも見聞を広めたが、それはまた次回に述べることにする。

村上春樹と読本の方法

研究こぼれ話 12

広嶋 進

村上春樹の新作『1Q84』（二〇〇九年五月二九日刊）が大いに売れて話題となっている。発売四ヶ月後の九月三〇日付の新潮社の新聞広告によれば、第一巻が一二三万部、第二巻が一〇〇万部、計二二三万部を発行したという。

本作に対する批評家の評価は、他の村上作品と同様に、極端な対照を示している。「圧倒的、桁違いのスケールをもった作品」（加藤典洋氏）という高い評価をする人もいれば、「小説といえるのか。ライトノベルとどう違うのか」（越川芳明氏）と疑問を呈する人もいる。本作品は完結しておらず、第三巻が来夏刊行予定であるという。したがってその全容はまだ明らかになっていない。

けではない。ここでは、村上の他の長編小説を取り上げて、彼の作品群が共通して持つ特色について述べてみたい。対象とする作品は『羊をめぐる冒険』である。

『羊をめぐる冒険』は一九八二年に刊行された作品で、村上の本格的な長編小説の第一作目にあたる。この作品は彼が小説家として生計を立てていく決意をしたのちに発表された作品である。あらずじは次の通りである。

ある日「僕」のもとへ親友の〈鼠〉から手紙と羊の写真が届く。「僕」は羊の写真を広告に使うが、それを見た男から写真中の星斑のある羊を探すように脅迫される。「僕」は一頭の羊と〈鼠〉の行方を追って、ガール・フレンドと北海道へ渡る。その地で「僕」は、羊の霊が人間に取り憑く現象と秘められた歴史について知り、〈鼠〉の亡霊と出会う。

本作について内田樹氏は以下のように述べている。

『羊をめぐる冒険』は直接的には『ロング・グッドバイ』（レイモンド・チャンドラー作）を下敷きしている。そして、その『ロング・グッドバイ』は『ザ・グレイト・ギャツビー』（スコット・フィッツジェラルド作）を典拠にし、さらにその『ザ・グレイト・ギャツビー』は『ル・グラン・モーヌ』（アラン・フルニエ作）に拠っている。本作はこのような重層構造を持っている。こ

のような指摘をしたあとで氏は言う。

「オーギュスタン・モーヌ君の悲しみと、テリー・レックスの悲しみと、ギャツビーの悲しみと、鼠の悲しみが重なってくる。少年の日の、報われない恋に殉じる少年の悲しみが倍音を奏でて、奥行き深い響きとしてからだにしみ込んでくる。たぶん村上春樹自身も、オリジナリなまったく新しい物語を書いていこうというのではなく、読み終えることにその後ろにまた別な物語が見えてくるような、奥行きのある物語の書き方をしていると思います。」（「内田樹が語る村上春樹」「イン・ポケット」二〇〇八年五月、講談社）

右で「倍音」というのは「楽音が周波数の整数倍の周波数音を随伴する現象」で、内田氏の村上春樹論のキーワードである。氏によれば、『羊をめぐる冒険』を読むという経験はその背後に「また別な物語」を重ねて読む経験をすることであるという。

内田氏は、文学において「倍音を出す」シンプレな方法は本歌取りであると語る。

「たとえば芭蕉の紀行文などでも、謡曲の「松風」であったり、『源氏物語』であったり、『平家物語』であったり、芭蕉のそれまでの先行するすべての文学的記憶を含んでいるわけですね。そして、文学的な教養のある読者なら、ある一つの文章を読んだ瞬間にそれが誘発する文学的記憶がいつせいに湧き起こる。」（同右）

氏は『羊をめぐる冒険』が和歌における「本歌取り」と同様の方法によって書かれていると結論づける。内田氏のこの見解は秀逸であり、村上文学の本質を言い当てた卓見であると思う。

野口武彦氏は、かつて上田秋成を論じた評論において、物語の引用によって重層化されていく秋成の物語の方法を「引き物語」的方法」という造語で示した（『秋成幻戯』）。それにならって言えば、村上春樹の作品は「引き物語」的方法によって作られている作品ということになる。

したがって、内田氏が語るように、村上作品に「オリジナルなまったく新しい物語」を求めるのは作者のねらいと齟齬をきたすことになるであろう。春樹作品は「小説」というよりも「物語」が重ねられた「物語」というべきものであり、作者は引用と二重写しによって、大きな物語を紡ぎ出すと意図しているのである。

村上作品に対して批評家の評価が極端に別れるのは、このような作家の小説作法（実は物語作法）に関して、それを容認する評家と強く拒絶する評家に分かれるためであると考えられる。

蓮實重彦氏がかつて、『羊をめぐる冒険』は「物語そのものともいえるべきあからさまな小説」であり「すでにどこかで語られている物語の反復」であるとして否定的な評価を下した『小説から遠く離れて』。蓮實氏は『羊をめぐる冒険』は「小説」として認めることはできないと主張し

ているのである。

しかし、江戸時代を振り返ってみると、村上春樹のタイプの作家、すなわち、「すでに語られている物語の反復」を書く作家が多数存在していた。上田秋成、曲亭馬琴に代表される読本作家たちである。

現在大きな書店に行くと村上春樹のコーナーがあり、そこには彼が翻訳した作品が自作の小説作品と並んで置かれている。前述した『ロング・グッドバイ』や『ザ・グレイト・ギャツビー』も村上訳があり、さりげなく置かれている。彼は自らの本格的な長編小説第一作の典拠をこのような形で示しているものであり、読者に自作の重層的読解を促しているとも考えられる。

読本というジャンルは、写実的な風俗小説である浮世草子に対抗して、十八世紀に出現したジャンルである。その起源は、浮世草子にあきたらなくなつた文人・学者が明清の中国口語体小説に親しみ（すなわち原文で読み）、それらを日本語に翻訳したことにある。そのうち十八世紀半ばに中国口語体小説の翻案作品が著わされ（『英草紙』、読本というジャンルが確立していく）。

読本作品と村上作品に関して、私は、リアリズム小説に対抗して現われたこと、外国小説の翻訳を源流としていること、「引き物語」的方法、「物語の反復・重層化」を主たる方法としていることにおいて、共通性と類似性を見い出す。村上

春樹は私にとって平成の秋成であり、馬琴である。

不思議な出会い その十二

琉球・沖縄

横山 學

この秋、沖縄県立博物館・美術館で、特別展「琉球使節、江戸へ行く！」が開催され、期間中に文化講座とシンポジウムも催されました。琉球使節についての展示は、本土ではこれまで何度か行われていますが、沖縄においては初めてのことでした。今年、慶長十四年から数えて「薩摩の琉球侵攻四百年」にあたるのです。薩摩では参勤交代を「江戸上り」と呼び、琉球でも使節の派遣をそう呼んできました。使節は、琉球国王の襲封の恩謝と將軍代替わりの慶賀のために、琉球国王から徳川將軍に対して派遣されました。近年この使節派遣を、「江戸上り」から「江戸立ち」、すなわち「江戸に上らせられた」ものとしてではなく、幕府や薩摩との「ウトウイヤ（御取り合い）」（外交折衝）として位置づけようという気運があります。しかしながら、名称は認識の反映です。薩摩では参勤交代を「江戸上り」と呼んでいます。当時の江戸の文人識者は、琉球国からの使者が幕府に「参府」し、江戸に「上つて」来たとして受け取りましたし、使者の「采聘」を幕府は喜びました。多くの庶民たちは、当時やってきた朝鮮通信使たちとの違いを判別するのは難しかったでしょう。

シンポジウムで、琉球・中国交渉史の専門家である深沢秋人さんは、近代の明治政府と琉球藩・沖縄県の交渉史を紹介してくれました。わたくしは、琉球国使節を迎えた側の、近世日本の琉球観について話しました。江戸時代を通じて、使節の渡来は琉球へ心を開ける契機でした。渡来の度に、これに関心が高まり、文人識者の間で琉球に関する知識が積み重ねられ共有されました。そして、南島への憧れは庶民の間へも浸透していったのです。今回の旅で、わたくしは葛飾北斎が描いた名所八箇所を巡りました。埋め立て工事による地形の激変もありますが、描かれた特徴を手がかりに、全箇所を足で確かめることができました。案内者は、「朝日新聞日曜版」で現地取材した青柳光朗さんです。天保期の使節渡来は最大の「琉球ブーム」を引き起こし、多数の「琉球物」が刊行されました。北斎も、江戸で再版された『琉球国志略』（中国の地誌）にある墨単色の「球陽八景図」を自分の絵として取り込み、雪まで降らせたのが八枚組の彩色浮世絵『琉球八景』（「泉崎夜月」「長虹秋霽」「龍洞松涛」「采村竹籬」「臨海湖声」「城岳靈泉」「中島蕉園」「旬崖夕照」）でした。青柳さんは、本島の北西にある伊是名島へも同行してくれました。第二尚氏の始祖である尚円王（金丸）が生まれた島です。島まで約五十分のフェリーは、源為朝が「運を天に任せて」上陸したという伝説の場所、「運天」の港から出航しまし

た。十四平方キロ程の小さな島ですが、戦禍を免れて樹木も多く、昔からの佇まいが静かに守られています。首里の町も戦争さえなければ、もっと大きな家並みが連なり、多くの文化財が守り伝えられていたであろうと、思いを巡らせました。

今回の展示で、わたくしにとつて最も見応えがあったのは『儀衛正日記』でした。使節の行列を管理支配する儀衛正（職名）の記した天保三年の記録で、日々の天候に始まり、衣装や路地楽の内容まで詳細に記録されています。この史料の存在を原口泉さん（現在は鹿児島大学教授）から教えて頂き、直ちに東京大学の史料編纂所にある書写本を確認しました。そして原本所有者の尚裕氏に全頁複写の許可を頂き、首里から江戸までの往復全行程の概要を「江戸の琉球人・天保三年『儀衛正』」として『江戸の民衆と社会』（吉川弘文館）にまとめ、後に拙著『琉球国使節渡来の研究』に収めました。三十年近く前のことです。原本は琉球王府にあったものです。東恩納寛惇が最後の琉球国王尚泰の伝記作成を依頼され、資料として明治四十年に首里から東京の尚侯爵邸に移された書籍のひとつです。そのため幸いにも戦禍を免れました。その後、尚家の姻戚となった早稲田大学附属図書館特殊文庫の松本弘さんが、銀座の福音館ビルの一室で、長年にわたってこれらの書籍の虫食いを丹念に補修したり裏打ちして、大切に保管なさっていました。わたくしも、何度か修復作

業を見せて頂いたことがあります。近年、尚家の家宝（刀剣・冠・衣装など）とともに書籍類も寄贈され、「国玉」として認定されて、現在は那覇市に委譲されています。わたくしが当時閲覧したのは、史料編纂所による書写本でしたが、この時に目にしたのは、まさに王府に残されていた原本だったのです。他にも使節の行列記録としては「副使座喜味親方日記」などがありますが、具体的な内容についてはまだ知りません。大いに興味のあるところです。

学生時代、総理府発給の緑色の渡航旅券を手にして、初めて那覇港の棧橋に降りたのは、四十年前のこの季節でした。早稲田大学の古代歌謡研究者の上野理先生に頂いた紹介状を持って、首里の琉球大学に池宮正治先生をお訪ねしたのです。今回も何人かの旧友と再会し、旅の終わりに、池宮

道光格廿五年 辰九月朔日 晴
天保三年 辰九月朔日 晴
今日如江戸出立之例、再冠冠服、
衣裳、足袋、履、夜着、
お供物、
樂ら殿内縁公新橋屋、
色、
太守様御巻を、
涉はる角二、
五、

【儀衛正日記(書写本)】

正治先生と県立博物館でお会いすることが出来ました。沖縄について何の知識も持っていなかった学生が、琉球・沖縄を学ぶことで多くの師や友と巡り会うことが出来た幸せを感じています。

【お知らせ】

来る平成二十二年三月十六日に千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館の第六室展示室が、開館されます。この部屋は「戦争と平和」「戦後の生活革命」をテーマにした展示です。同時に併設されている副室の展示も始まります。この副室では「移動する人びと」をテーマにして、日米交換船・米国移民・戦後の特派員社会・朝鮮戦争を取り上げます。長年にわたって整理保管してきたフランク・ホーレーの遺した品々を精巧なレプリカに仕上げ、ここに展示することになりました。G HQ身分証明書や名刺、パスポート、ロンドン・タイムスへ打電した記事原稿と掲載された記事の切り抜きや貴重書類などです。占領下の特派員の生活を紹介するために、「東京特派員クラブ」があった「丸の内会館」の一室を、「特派員の部屋」として再現しました。机・椅子・タイプライター・ペン立てなどは、完全に当時のものを揃えました。この副室に限り展示期間は一年です。稀観本の収集家としてではなく、「ジャーナリストのフランク・ホーレー」が紹介されます。近づきましたら、ご案内を差し上げる予定です。(MY)